

# 日本人の信仰

日本文化体験交流塾 理事長

米原 亮三

富士吉田市の富士浅間神社の参道の鳥居(写真)の前に立つと、向こう側には、重要文化財の本殿などがある。しかし、古来、日本人が信仰の対象としてきたのは、これらの神殿ではなく、神殿の奥の富士山そのものである。男体山や大山、筑波山など多くの山が信仰の対象となっている。

また、浅間神社の本殿の前には、樹齢千年の太郎杉と夫婦榎があり、しめ縄がつけられている。山中の巨石を祀り、これに参拝することも多い。私たちの祖先は、こうした山々や樹木、巨石などのほか、太陽や雲、雷、風、海、川、動物など、自然界の多くのものをあるときは恐れ、信仰の対象としてきた。

現在、神社仏閣の庭園には、石や樹木、池や川などが配置されているが、こうしたものは、本来、山地まで出向いて拜んでいた信仰対象を、小さくして作ることから始まったといわれる。

こうした多神教的な宗教観は、日本だけでなく、世界の多くの国々にも存在する。ギリシャでは、様々な神々が喜怒哀楽の感情を持ち、神話となっている。

神田明神の禰宜<sup>ねぎ</sup>である清水祥彦氏によれば、宗教観と気候風土は、深い関係がある。豊かな森があり、川や海から食べ物を採集できた古代社

会では、自然の恵みを感謝して、多神教的な宗教観が支配することが多い。

これに対し、砂漠化された風土のなかで、キリスト教やイスラム教などの唯一神が生まれた。その後、唯一神の宗教集団は、ローマなど巨大な国家統治の原理と結びつき、世界的な宗教として成長した。

日本では、多神教的な信仰心を基本に神道が生まれ、仏教や儒教など、大陸から伝わる新しい宗教を柔軟に受け入れてきた。お釈迦様や阿弥陀様や観音様も、日本の新しい神として付け加わってきた。明治政府の神仏分離政策まで、お寺の敷地内に稲荷神社が

あるなど、神社と仏閣が混在することは、極めて一般的であった。

多神教には、聖書のような経典がなく、分かりにくい面があるが、プラスの側面もある。一神教が支配するヨーロッパや中東の国々では、宗教上の差異を理由の一つとして、様々な戦争が行われてきた。日本では、異なる宗教であっても、容易に受け入れるだけに、宗教を理由とする戦争は少ない。

日本人は、亡くなった先祖を仏として、神として敬ってきた。父や母、祖父、祖母を大切にすることは、素晴らしいと思う。食事をする際にも、食べ物となる命に感謝し、「いただきます」と言う。築地の波除神社には、海老塚、あんこう塚、玉子塚などがあり、こうした命あるもの、生活を支えるもの全てに感謝することこそ、日本人の信仰である。日本人が先祖から伝えられた信仰は誇りとすべきものと、私は考えている。



富士浅間神社